

―自活の戦いも大変だったでしょう―

大変でした。話せば一時間以上かかりますので、時間の関係もありますのでこの辺で終わりたいと思います。

航測連隊に入営、

航測手として

―南方方面転戦記―

山形県 鈴木 栄三郎

―入営年次、入営部隊はどこでしたか。また南方方面を転戦したとのことですが、どの方面へ行かれましたか―

私は大正十年十二月二日生まれで、昭和十八年の兵隊検査です。当時、横須賀市追浜にあった海軍航空技術廠に勤務しており、本籍地の山形には帰れず、横須賀での検査で甲種合格となりました。兵種は仕事の関係からか飛行兵となり、昭和十八年九月十日茨城県水

戸市郊外にあった第十一航空隊第七中隊に入隊しました。そこに五日間ほどおり、同月十五日静岡県浜松市郊外にあった第一航測連隊に転属を命ぜられ、同日第六中隊（中隊長瀧川智雄大尉）に配属となり、以後、無線によるモールス信号の送受信及び「地一号方向探知機」の操作など一般的な戦闘訓練を厳しく受けました。

昭和十九年一月二十一日、検閲終了と同時に航測手を命ぜられ、同年二月四日第六航測連隊（ラバウル方面）に転属を命ぜられ、同月四日輸送指揮官前田少尉以下約五百名の一員として浜松出発、同月五日門司着、同月七日十三隻の輸送船団に海軍の護衛艦がつき門司港を出港しました。私たちの乗った輸送船「打出丸」は七千トン弱、速力は九ノットくらいで、あまり上等な船ではなく、我々の居住区は船倉に何段にも棚を作り、そこに重なり合って寝なければならぬ状態でした。

当時、制海空権は悪化していると聞かされていましたが、飛行機による空襲はなかったものの敵潜水艦の

活動は激しく、私たち十三隻の船団も鹿児島湾沖二十カイリの所で魚雷を受け、僚船が一隻沈没しました。このため急遽鹿児島港に退避し、二月二十一日（紀元節）後同港を出港しました。台湾に向かって南下途中、先にやられた船の兵隊あるいは乗組員の死体が漂流しているのを見たときは、明日は我が身かと覚悟を改めたに次第でした。

以上のような状況の中、対潜監視は真剣に行いながらの航行でしたが、台湾の基隆に着くという夜、僚船がまた魚雷を受け沈没しました。基隆港に三日ほど待避した後再び出港、台湾の陸地が見える沖合を航行していた昼間の二時ころ、隣横約八百メートルの所を航行中の僚船が魚雷を受け、物凄い音と共に轟沈しました。その船の乗員を救助しようとして止まり、救助している僚船が目の前で沈没し、まるで悪夢を見ている思いでした。そこで我が船もまた救助しようとして止まればやられるのは必定なので、全速力でその場を退避、高雄港へ入港しました。

そこで約一週間ほど停泊。残った九隻のうち六隻が

一船団となり比島方面へ出港。私たちの乗船「打出丸」と外二隻は一船団を組み、海軍の駆潜艇二隻に護衛されパラオ港へ向かって太平洋を南下しました。途中、今までの苦い経験から対空対潜監視を怠りなく行いながら、航行しました。幸い太平洋の真ん中では敵襲を受けることはなかったものの、あくる日の午前十一時ころにパラオ港に着くという夜の十時ころ、近くに敵潜水艦があるので対潜監視を嚴重にするよう警報が出されたため、スコールが降る真つ暗な闇の中、全員が甲板に出て監視に立ちました。

そのうち海面を一筋の白いものがサツと見え、同時に物凄い爆発音が船腹であがる。三隻のうち、私たちの乗船が一番大きいので敵潜の標的となり、機関部に一発魚雷を受け航行不能となりました。三発の魚雷が来たそうですが一発だけだったので轟沈はまぬがれ、人的被害は二人の戦死者のみであったことは不幸中の幸いでした。だか船腹に大きな穴があき、船長から「いずれは沈没するだろうが、今直ぐに沈むことはないのでまだ海に飛び込むな」との指示がありました。

飛び込んだのは魚雷を受けてから約十二時間後の午前十時ころ。船長からそろそろ船が沈むので海に飛び込み船が沈むとき、巻き込まれないよう出来るだけ離れるとの指示が出ました。あらためて海を見ると、夜腹ごしらえのため食べて海に捨てた缶詰だの食糧の残りに四、五メートルもあるような鮫がウヨウヨ集まって来ており、こんな所に飛び込んだらたちまち餌食になるだろうとゾツとしました。しかし飛び込まないわけにもいかず、潜水艦にやられた場合を想定し、高雄港で積んで来た青竹を海に落し、天皇陛下万歳を三唱し全員海に飛び込みました。

できるだけ、ばらばらにならぬよう青竹をつなぎ合わせてつかまりました。他の二隻は止まって私たちを救助しようとするれば台湾沖でのような二の舞となるので駆潜艇一隻に守られ全速力でパラオ港に直行、もう一隻の駆潜艇は我々の漂流している回りを警護してくれました。しかし夜になっても救助してくれることはせず、長時間海水に漬かっていると南方の海といえども寒くなってくるやら眠くなるやらで地獄の底に引き

込まれるような気分でした。眠ればこの世とおさらばと聞かされていたので、お互いに眠った時は頭をポカッと叩いて起こしてやります。するとハッと目を覚まし、「有り難う」と礼を言われる場面もあり、頭を叩いて礼を言われるのは初めてだと後日の笑い話の種となったものです。

海に飛び込んで約二十七時間後、パラオ港へ二隻の輸送船を護送し戻って来た駆潜艇と二隻になったところでようやく救助が始まり、一隻が止まって救助、他の一隻がその回りを警戒しながら、全員駆潜艇に救助収容されました。門司港を出港してから約一カ月かかったのです。三月四日、パラオ港に着きコロール島へ上陸しました。

―パラオのコロール島上陸後の行動について、また、ラバウルにある第六航測隊にいつ着かれましたか―

上陸後コロール島から本島に渡り、案内されたニツパ椰子で作られた兵舎で一時休養をとり、船がやられた時に装備品は全部海没しゴボウ剣だけになったので装

備品一式の支給を受けました。

その後、何日後か記憶にないのですが、一緒に上陸した約五百名のうち半数がラバウルへ向け出港、私たち半数は船が無いので待機となり、本島に建設中の飛行場建設に従事しました。

当時、島は一度も爆撃を受けず、南方の中継基地として物資は比較的豊富で、戦況が悪化してきている中でも比較的平穏でした。だが五月中旬と思われるがパラオ港に戦艦「武蔵」が入港停泊しました。それを見て海軍の兵隊が「武蔵」が入港しているので必ず空襲があるというのを聞いて半信半疑でしたが、停泊して二日目の朝米艦載機による物凄い空爆がありました。その時「武蔵」は事前に空爆を察知したのか出港して被害を受けなかったのですが、二日間にわたり延べ三千機にも及ぶ空爆で港に停泊していた船舶は壊滅的な打撃を受け、港に積んであった大量の戦略物資もほとんどやられました。

そのような状況となり、パラオに上陸して三か月半ほど経過したのですが、船がないのでラバウル行きは

不可能になりました。六月十八日、急に乗船命令が出て、夜パラオ港出航。乗船してから比島方面に向かうことを知らされました。いずれの地域も制海空権は極度に悪化しているので航行中はいつ空襲を受けるか、魚雷攻撃されるかと薄氷を踏む思いでしたが、途中セブ島に寄港し、六月二十九日マニラ港に無事上陸しました。

同日より比島作戦に参加、七月一日第四航空軍航空通信隊に転属を命ぜられ、同日第二航測連隊に転属、同日第一中隊に編入となり、マニラの兵站到十日間おり、次にクラークの飛行場に派遣となり約十日間ほど駐屯し、またマニラの兵站に戻りました。

七月二十六日マニラ港出航。航行中は暑いのと魚雷を受けた時のことを考え、狭い船倉にはだれも入れず、皆甲板にいます。途中何事もなくミンダナオ島のカガヤンに無事上陸、船からの機材の陸揚げが終わると同時にその機材を受領し、それぞれの任地に展開しました。これより第二十四対空無線隊の吉田三次大尉の指揮下に入りました。

—カガヤンに一緒に上陸した航測隊は何個分隊でどこに展開されましたか。また展開後の活動について—

カガヤンに上陸した分隊は四個分隊で展開地は次の通りでした。

カガヤン西飛行場私の分隊

分隊長 山田重雄軍曹 生存

分隊長 塚本重美兵長 戦死

〃 八ツ田栄上等兵 〃

〃 鈴木栄三郎上等兵 小生

デルモンテ飛行場

小隊長 三井田達平少尉 戦死

分隊長 登美良吉曹長 生存

分隊長 大谷守兵長 〃

〃 外 九名

デルモンテ南飛行場

分隊長 小山欣秀伍長 生存

分隊長氏名人数については不明

バレンシヤ飛行場

分隊長 高橋〇〇曹長
分隊長 吉田秀雄軍曹 生存
外の分隊長氏名人数については不明

以上のとおりの展開です。私たちのカガヤン西飛行場はカガヤン橋を渡り左岸を西へ五キロくらい西方で、カガヤンの町を眼下に見渡せる台地にありました。一本の滑走路は当時ですから舗装などされていないのですが、結構しっかりしたものでした。その飛行場の端に組立て式の小屋を建て「地一号方向探知機」を設置し、そばに自分たちの住む掘っ建て小屋を建て、ようやく七カ月ぶりに航測手の任務に就くことになりました。

私たち航測手の任務は飛行場より出撃した飛行機が、悪天候あるいは何らかの事情で飛行場の方向、位置が分からなくなり迷子状態になったとき、あらかじめ打合せである周波数の電波を飛行機が発信、それを方向探知機で方向をとらえ、飛行場の位置を知らせ誘導することを任務としました。華々しく銃で撃ち合う部隊ではなく、したがって、銃も三八式歩兵銃が分隊に一

丁支給になっただけで、芝居の裏方役と同じで、飛行機が飛来しなくても毎日待機の状態でした。

私たちの分隊は先に書いたように四人で、食糧は当座だけということでカガヤンを出るとき、ごく少量支給され、後はカガヤンの飛行場大隊より支給を受けることになっていました。しかし、カガヤンでは「まま子」的な立場なので思うように支給して貰うことができず、体力が落ちこみ、まず最初に Deng 熱病にかかり、次に全身にカイセンという皮膚病となり、次にマリアの三日熱に侵され、ますます体力が悪化するのです。と共に戦況も日々悪化し、九月十日ごろだったと記憶しているのですが、カガヤンの街や飛行場にグラマンが飛来、爆弾を投下するやら機銃掃射をするやらで大きな被害を蒙りました。特に滑走路に千キロ爆弾を投下され、直系十メートル、深さ五メートルもある摺鉢状の穴をあけられました。それを飛行場大隊の兵隊が埋め戻すと、次の朝また同じように穴をあけられ、また埋め戻すということの繰り返しでした。それからは毎朝日課のように銃爆撃があり、我が方の高射

砲等の対空砲火を浴びることが全然ないので、敵機は我がもの顔で低空で飛び回り、時には大型爆撃機のコンソリー五十機余りが編隊もとかず低空で人馬殺傷用の小さな爆弾を飛行場全体に豆まきのようにばらまいて行くのです。

十月二十日前後には B25 大編隊がカガヤンの街を猛撃、爆弾投下、機銃掃射で街は見る間に破壊され、火災が発生、すっかり灰になりました。敵機が低空での爆撃なので、我々のいる台地の飛行場からは眼下に見え、我が方の対空砲火による抵抗も全然なく、爆撃が終わると悠々と飛び去って行く状態で、戦況は極度に悪化してきました。

その直後、敵の大艦隊が来襲、ミンダナオ島に機甲部隊が上陸するらしいとの噂があり、そのうち、百雷が一度に落ちたような物凄い艦砲射撃の音が聞こえました。これで我々も終わりかと思ったのですが、ミンダナオ島には上陸せず、レイテ島に上陸が始まったとの情報が入りました。

今回は敵の上陸はまぬがれましたが、早晚上陸して来ることは必至の状況にあり、我が分隊には機材をまとめて島の中央部へ集結するよう命令がありました。我が分隊の四人は機材はトラック一台分の荷ですが、トラックは配備されておらず、このためデルモンテ分隊に頼んでトラックを用意してもらい西カガヤン飛行場より撤退しました。昼間は空爆の標的となるので夜間だけの行動となり、島の中央部、たしかマライバライという所だったと思いますがそこに集結しました。そこには吉田大尉も集まっており大尉の指揮下に入ってから初めて会いました。

一旦はマライバライに集結しましたが、ミンダナオ島への上陸とともに中央部への敵の追尾は急で、やむを得ず通信機材は全部破壊し、少しばかりの食糧を搬送しながら、なんとという川か分からないが、相当大きな川の左岸づたいに山へ向かって後退しました。途中、我が分隊の塚本重美兵長が敵と交戦戦死しました。マライバライには我が隊の外多数の部隊が集結して来ていました。それらが皆山の奥へ奥へと追い詰められて

後退する。少しばかりの食糧を搬送したとはいえ、たちまち食糧も尽き、特に塩が無くなり、東海岸に出て塩を取って来るよう師団命令が出されました。そこで、佐藤准尉を長とする一個小隊と今村少尉を長とする一個小隊合わせて約三十五名が東海岸へ向かうことになりました。私は今村小隊に配属となりました。

出発に当たっては食糧の支給は全然なく、先の食糧を空頼みしてです。しかも栄養失調一歩手前で、いずれもマラリアに罹患している者が道とてない山を越え、何百キロも離れた東海岸まで行き塩を取ってまた戻れるだろうかと疑問を持ったのですが、命令であるので背くわけにもいきません。これはたしか十八年十一月ころと思われませんが、死に等しい地獄の苦しみのような東海岸行きが始まりました。途中他の部隊の兵隊が栄養失調で倒れて動けなくなっている者、また死体となって蠅や蛆がたかっている者、まるきり白骨化している者などにいたる所で出会います。それが日常茶飯事であり、明日は我が身と思っている故か、亡くなった人には申し訳ないが特別な感情がわかなかつたもの

です。

山中の食糧は野草が主体であり、たまに捕れる蛙、蛇、オタマジャクシなどは最高の御馳走でしたが、いずれも塩なしの料理なので汗をかいても塩辛さがないのです。沢づたいに登るので軍靴は破れ役に立たず、全員裸足で、しかも水虫にやられ血がにじんでいて皆と共に歩かないと山中に取り残され野垂れ死にします。山中には裸で腰蓑を着け、槍と弓を武器とする部族があり、一人になるとたちまち襲われるので嫌でも歩かなければならない。

そのような苦労の末、何とか山を越し、ダバオ川の源流と思われる谷川に出ました。そこからは下りとなりましたが依然として道無き山や谷を渡り、十九年十一月本隊を出発してから八カ月後の二十年の八月ころようやく平地らしい所に出ました。しかしその先には米軍がおり、とうてい海岸に出て塩を取ることはできず、山の裾野を食糧を求めて放浪しました。その間カガン当時から一緒であった八ツ田栄上等兵が栄養失調で戦病死。ほかに山中でゲリラに襲われ戦死した者、

山中に置き去りにした者などで各小隊共三分の一ほどの犠牲者が出ていました。

― 八月ころ平地に出たとのことですが、終戦になったことはいつ知りましたか、そして復員したのはいつですか―

平地に出たものの海岸には出られず、ダバオ川中流域で食糧を求めながら、しかも既に終戦になったなどということは夢にも思わず、随分敵機が飛ばなくなつたものだからいでした。十月末から十一月初めにかけて、民間機らしいものが飛来、日本語で「戦争が終わつたから山から降りて出て来るように」と拡声器で言いながら低空でビラを撒いて行く。

最初は何をいうかと信じられなかったのですが、何回となく来るので、半信半疑ではありましたが試みに我々も出て見ようということになり、歩いて出るのも大変なので、あちこちに竹林があるので竹を切り出し四人乗れる程度の筏を作りダバオ川を一日半かかって下りました。そこは何という地名かは分からなかったのですが、米兵とフィリピンの兵が、山から続々下り

て来た日本兵の武装解除をしており、そこで本当に終戦になったことを知りました。我々も筏から上がると銃とゴボウ剣を取り上げられ、米軍のトラックでダバオ市にある天幕で作った収容所に収容されました。それから一週間ほど、収容所暮らしとなりました。山から出て来た時は半袴半袖で靴も無く裸足でした。米軍からは服や靴の支給などはなく、たまに使役に従事させられる程度で労働を強制させられることもなかったのです。

十一月十八日ころと記憶していますが、日本人の通訳から乗船の指示が出たことを告げられ、水陸両用の自動車でダバオ港に停泊していた「ダルフワルツエマーン号」という米軍の貨物輸送船まで乗り入れ乗船しました。収容所暮らしのとき、今度は日本に帰されずオーストラリアに送られ労働させられる、との噂があり、十一月末ともなれば日本はかなり寒くなるはずだが乗船して十日過ぎても寒くならないのでオーストラリア行きは本当か、などと思いました。

だが十一日目の朝起きて甲板に上がりましたら寒く

なり、小笠原諸島が見えました。ああ本当に日本へ帰れたんだと思うと感無量であり、マライパライの山中で別れて来た人たちはどうなっているだろうかと思いをよぎりました。

思えば昭和十九年二月七日門司港を出港、転々と各所を回り、生きて日本の土は踏めないものと覚悟していたのですが、約二年後の昭和二十年十一月三十日、半袴、半袖、裸足でしかもマリアアや皮膚病に侵され、髪は伸び放題の乞食同然の姿で突降る浦賀港へ上陸。衣服、靴などの支給を受け手続終了と共に故郷へ帰りました。

戦後五十年を経て今、当時を振り返り、航測手として各地を転々としたなかでも、測手本来の任務はほとんど遂行できず、何のための戦場行きであったのかと疑問を持つとともに、若くして散っていった戦友の顔が今でも目に浮かびます。